

春夏秋冬

休日は、よく水元公園にサイクリングをする。
江戸川堤のサイクリングロードを軽快に走り、中川を廻って約一時間のコースである。
さすがにこの猛暑。到着してのビールは五臓六腑にしみ渡る。
この公園は、沼があり、小川があり、雑木林がある。
大人も子供も、釣りをしたり、エビガニとりをしたり、
昆虫採集をしたり、昔ながらの遊びをしている。
公園なかほどの小川で、エビガニとりをしている家族がいた。何かを釣り上げたのだろう。
若いお母さんが大声でお父さんに報告している。子供は全くほったらかしだ。
しかし、後ろで子供たちが目を輝かして、その獲物を観察している。
親の、大人の感動に、子供が一緒に感動している。
きっと子供たちの素晴らしい思い出になる、
そんなことを思わせるシーンだった。
この自然豊かな公園では、大人も子供心を呼び覚まし、
子供は裸足で泥だらけになって遊んでいる。
木や草の揺れる音。鳥の鳴り。遠くに子供たちの遊ぶ声。
草木を枕にほろ酔い男は、心地よいとた寝を始める。
気がつくと、周りに子供たちの姿はない。



一筋の声去り行きて夏の原

風月 (M)

循環型社会研究会 (Workers Club for Eco-harmonic Renewable Society)とは

循環型社会研究会は、10年来有志で環境問題現場でのフィールドワークを中心に活動しておりましたが、2002年の7月3日に特定非営利活動法人の法人格を取得しました。

「次世代に継承すべき自然生態系と調和した循環型社会のあり方を地球的視点から考察し、地域における市民、事業者、行政の循環型社会形成に向けた取組みの研究、支援、実践およびそのための交流を行う」ことを目的として活動しております。

単に、資源のリサイクルや物質循環に注目するだけでなく、自然生態系と調和した未来世代にとっても維持更新が可能な仕組みを備えた具体的な地域における循環型社会づくりと、それを担う“循環ワーカー”的養成がわれわれのテーマです。

循環研通信／JUNKAN No.09

2004年 7月発行

発行人：山口 民雄（代表）

編集責任者：菌 已晴（事務局）

デザイン：宍戸 一嗣（会員）

特定非営利活動法人循環型社会研究会

東京都中央区京橋1-9-10 フォレストタワー 株式会社ノルド内

Tel : 03-5524-7334 Fax : 03-5524-7332

Eメール : junkan@nord-ise.com

HP : http://www.nord-ise.com/junkan

JUNKAN 循環研通信 NO.09 2004 JULY

Junkan Workers Club

特定非営利活動法人 循環型社会研究会

代表就任に当たって

この度、長年代表を務められました高杉晋吾氏の退任に伴い、代表をお引き受けいたしました。代表として最適な諸氏が本研究会には多数いらっしゃるにもかかわらず、お引き受けさせていただいたのは、高杉氏とともに副代表として本研究会で活動してきたからであると思っております。高杉氏は本研究会の前身であるバルディーズ研究会の分科会「企業の環境主義」に参加され（1991年）、その後、現在バルディーズ研究会運営委員である宮島敏夫氏とともに本研究会を設立され、先頃まで精力的に活動されてきました。この間、高杉氏は全国を取材し、新聞、雑誌、書籍に発表し、問題提起をするとともに、私たち研究会のメンバーを現場に誘っていただきました。その結果、私たちは現在抱えている多くの環境問題の光と影を凝視することができ、また、多くの関係者と知己を得ることができました。この場をお借りして、改めて高杉氏に御礼を申し上げたいと思います。

こうした高杉氏の後塵を拝する私は、同じような任務を果たすことは到底不可能なことです。それでは何ができるのか、と問われても明快な回答ができないのが事実です。しかし、長年継続してきた本研究会が特定非営利活動法人となった現在、私たちの力量を高め、社会的存在として認知されるようこれまで以上に頑張りたい、という意欲は持っております。幸い、事務局体制も磐石となり、ワークショップ活動も活性化し、年間の活動も計画的に進行するようになってきました。「力量を高める」ためには、会員の層を厚くし、多様な意見が行き交うことが重要と考えます。特に学生、女性、若い人の参加が重要といたします。そうした活発な議論の中で「専門性」「先見性」「市民性」を確実に獲得していきたいと考えます。現在、企業、行政もNPOの知恵、活動に非常に大きな期待を持っています。本研究会がこの3つを獲得した暁には、こうした期待に十分応えることができるることはいうまでもありません。

この2～3年の活動が本研究会の趨勢を左右することと思います。会員の皆さんの英知を結集させ、社会的に認知されるNPOに成長させようではありませんか。

山口 民雄

CONTENTS

- | | | | |
|----|--|----|---|
| 01 | 代表就任に当たって | 16 | フィールドワーク報告
レジ袋税を施行すべきか否か、提言前の現場視察
案内：杉並区役所生活経済課 課長 井山利秋 氏 |
| 02 | 循環研セミナー報告①
土壤汚染とリスクコミュニケーション
講師：株大周 姜永根 氏 | 18 | ワークショップ活動報告
エネルギーWS
水循環WS
エココミュニティWS
森・棚田WS |
| 05 | 循環研セミナー報告②
杉並病がきっかけとなったレジ袋税の行方
—杉並区の環境税、眞の目的を達成するには?—
講師：杉並区議会議員 とかしき なおみ 氏 | 20 | 事務局からのお知らせ
2004年度総会報告
循環ワーカー養成基礎講座（記録者募集含む）
WS助成金募集
循環研通信投稿募集 |
| 13 | 循環ワーカー養成基礎講座 第一回
生態系と循環型社会
—調和と平衡をキーワードに—
講師：桜美林大学名誉教授 三島 次郎 氏 | | |

循環研セミナー報告①

「土壤汚染とリスクコミュニケーション」

講師：株式会社 大周 代表取締役 姜 永根 氏

コーディネーター：高杉 晋吾 氏（前代表）

日時：2004年2月25日(水) 18:30～20:30

会場：ノルドスペース セミナールーム（東京都中央区京橋 1-9-10 フォレストタワー）

姜 永根氏のプロフィール

滋賀県立膳所高等学校卒、韓国高麗大学卒。1988年に大周を創業。平成7年から滋賀県の企業としていち早く土壤・地下水汚染の調査業務を開始。調査・浄化・情報開示にかかるシステムを確立し、現在、不動産価値回復、不動産流動化の促進、利害関係者の相互理解を基本に土壤・地下水汚染問題の総合コンサルタント企業として躍進。最近では大阪市北区の「ザ・梅田タワー」、「OAP(大阪アメニティパーク)」の土壤汚染問題解決にかかる。滋賀県環境審議会水環境部会土壤・地下水汚染小委員会委員、滋賀県環境リスク検討委員会委員、大阪環境産業振興センターATCグルーンエコプラザビジネス交流会・土壤汚染対策研究部会長。

1. 土壤汚染問題の特徴

土壤汚染問題には、ほかの環境問題と比べて次のような特徴がある。

第一に、土地は私有財産という観点から所有権が絶対化しており、土壤汚染も公的なものではないことが前提となっている。

第二に、水質や大気汚染、騒音や振動などは五感で感じられるが、土壤汚染には目に見えにくく、臭いもない場合が多い。

第三に、利害関係者が極めて多岐にわたる。土地の所有者、使用者をはじめ、周辺住民、地域行政に加え、土地を担保に資金を提供する金融機関、土地を購入しマンションや住宅を建設する不動産会社や、消費者も利害関係者の一員である。

第四に、環境や健康リスクよりも不動産価値の下落など経済リスクの比重が大きい。

第五に、調査・浄化コストがきわめて高く、汚染地が遊休化される問題と秘めている。

2. 現状の土壤汚染調査・浄化の構造

現在行われている土壤汚染調査や浄化には構造的な問題がある。調査を実施する際、①土地所有者(事業者)が出資している会社が調査を行うケース、②事業者の土地を担保に融資している金融機関が出資している会社が調査を行うケース、③土地所有者(事業者)が建築会社などに解体、建築とともに調査・浄化も一括発注するケースが多い。

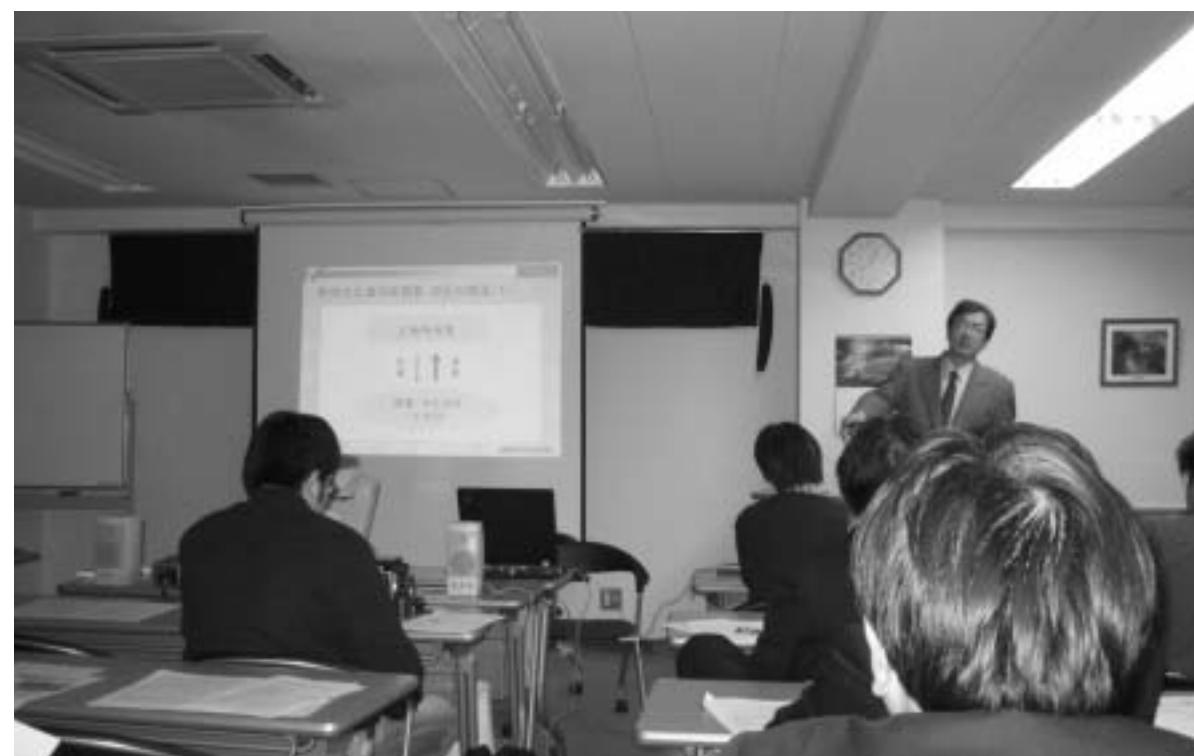
つまり、客観的、中立的な立場で調査することなく、事業者や事業者への融資者、事業者の親会社等が調査・浄化会社に影響を与える関係にある。したがって、土壤汚染に関する情報はできるだけ出さないようにしようとする傾向を招く構造になっている。

3. 今後あるべき調査・浄化の構造

今後は、欧米のように、土地所有者(事業者)と資本関係がない会社が土壤調査を行い、その調査・コンサル会社と資本関係がない複数の浄化会社によって浄化を行って、さらに、研究機関や有識者、またはNPOなどの第三者機関によって評価していくことが望ましい。

また、業務のプロセスにおいて、土地所有者(事業者)や調査・コンサル会社は、住民、地域行政、住宅販売会社、消費者と相互にリスクコミュニケーションを開拓することが必要である。

今のマーケットは、供給者の考えだけを提供するように作られた構造になっている。これは、消費者や住民の知見、知識はあまり豊富でなく、ばらばらで機能的な組織になっていないためだ。今



後は、消費者、住民が専門的な力をつけていくことが大事で、このことは結果的に土地所有者のメリットにもなってくるし、マーケットも健全になるのである。

4. リスクコミュニケーションを成功させるためには

リスクコミュニケーションとは、化学物質によるリスクについて利害関係者が情報を共有し、その対策について話し合い、解決していくことである。食品安全や原子力の分野でも行われるようにになってきている。リスクコミュニケーションの対象は消費者や地域住民のほか、事業者の株を保有する株主、また、メディア、地域行政、社員なども含まれる。

リスクコミュニケーションは、ただむやみに行えばよいわけではない。戦略を持たずになんでも情報開示というやり方では失敗してしまう。リスクコミュニケーションの失敗によって取り返しがつかなくなることが多い。

リスクコミュニケーションを成功させるには、いくつかのポイントがある。

第一に、住民説明会開催のタイミングの問題。住民へヒアリングしながら、できるだけ、住民みんなが参加しやすい日時を設定する必要がある。参加しにくい状況をつくることはかえって逆効果

になる。

第二に、リスクコミュニケーションチームの編成が必要なこと。事業者、リスクに詳しいインテリギー、司会役、質疑の仲介役をチームとして作り上げていくことが求められる。

第三に、わかりやすい資料を作成すること。基本的に住民は土壤汚染についての素人であることを念頭に置いて、できるだけ分かりやすい資料を用意することが必要である。しかし、中には玄人はだしの人もいるので、話をするときは、そのことを前提にしなければならない。

第四に、非言語リスクコミュニケーションを重視すること。コミュニケーションは言葉で行うが、説明会の雰囲気、説明者の物腰や態度がリスクコミュニケーションの成功か否かを決定づけることもある。

第五に、リスクコミュニケーションのアクターの役割を鮮明にしておくこと。

そして、最後に、リスクコミュニケーションは、目的達成まで徹底して実施すること。少なくとも数回は行う必要がある。

5. 事例

名古屋市西区の縫製工場跡地で土壤と地下水に有機溶剤による汚染が見つかった事例では、行政

や住民に汚染実態の情報を開示するように土地所有者を説得してリスクコミュニケーションを実施、有識者を集めて細かくチェックした。(詳細は、「大周 自治体、住民対策の徹底で土壤汚染対策を後押し」日経エコロジー2003年4月号、PP.196-197参照のこと)

大阪市北区におけるタワーマンション「THE UMEDA TOWER」建設プロジェクトの土地で土壤汚染が見つかった事例でもリスクコミュニケーションを実施した(NHKで取り上げられた)。気をつけたことは、どちらが正しくてどちらが悪いということではなく、両方が正しい、全ての当事者がWin-Winな関係になることを前提とすることであった。その結果、事業者にとっても一定の利益を確保するとともに、情報開示においても先進的事例を作り企業価値が高まった。ゼネコンは浄化工事を受注し、住民にとっても土壤が浄化され、行政にとってもひっきりなしにかかってきた問合せの電話がなくなった。3ヶ月ほど工事が遅れたものの、現在はそれを取り戻し、順調に工事が進んでいる。

著名なものとしては、同じく大阪市北区の三井マテリアルの前身の製錬所跡地を再開発して完成了大阪アメニティパーク(OAP)の敷地土壤がヒ素などで汚染されていたことがわかった事例があり、注目されている(詳しくは、高杉晋吾2003「大阪アメニティパークで基準値の数千倍もの重金属汚染」週刊金曜日489号、PP.28-30などを参照のこと)。マンション、オフィスタワー、ホテルタワー(帝国ホテル)からなる複合施設で、マンションは現在、汚染問題が解決するまで販売できない状態になっている。この事例でも、もともと住民はばらばらの状態であったのが、既に勉強会も5回ほど開かれ、徐々に力を結集させ、特に主婦の方々が大きな力をつけている。

6. リスクコミュニケーターに求められるもの

リスクコミュニケーションにおいて、ファシリテーター、コーディネーターの役割を担うのが、リスクコミュニケーターである。

リスクコミュニケーターに求められるのは、専門知識と経験と使命感である。専門知識には、環境、法律、不動産、論理学といった分野が含まれ

る。また、コミュニケーターとして、特に社会心理学を学んでいく必要がある。

経験としては、まず実際の現場経験である。実務では即断が必要な局面が多く、ディベートの体験などもあれば良い。さらに、企業と住民等とのWin-Win関係を形成するために企業経営の感覚を養うことも必要だ。企業は、必ずしも土壤汚染を引き起こそうと思って引き起こしたわけではない。かつては法律もなかった頃、製品を作って会社を発展させようとしてきたのであり、汚染は結果として起きたものである。しかも、お金がある企業はいいが、零細は苦しい。このように、企業も正しい活動をしてきたことを相互に理解することがWin-Win関係の構築のためにたいへん重要なと思う。

そして何より、リスクコミュニケーションをなにがなんでも成功させるという使命感や矜持、気概を持ちうるか否かである。同時に、問題解決力やバランス感覚も求められる。今後、是非とも若い人にも、リスクコミュニケーターを目指しがんばって欲しいと思う。

(この記録は、事務局・菌が記録し、姜氏に加筆修正いただいたものです。)

循環研セミナー報告②

「杉並病がきっかけとなったレジ袋税の行方」 — 杉並区の環境税、真の目的を達成するには？—

講師：杉並区議会議員 とかしき なおみ 氏

日時：2004年5月26日(水) 18:00～19:30

会場：ノルドスペース セミナールーム(東京都中央区京橋1-9-10 フォレストタワー)

前半は杉並病についての解説、後半は杉並区が全国の自治体で初めて条例化した『レジ袋税』について、と大きく2部に分かれての講演となりました。

【杉並病とは】

今日は盛りだくさんにするため、杉並病とレジ袋税について両方を取り上げる。

杉並病を聞いたことがない人はどのくらいいるか？(2名が挙手する)。関西に行くとほとんど誰も知らない。名前が杉並病なので、風土病じゃないかと思われている。

杉並病は、発症した時期がほとんど同じで、杉並中継所の移動した瞬間から発症した病であることが大きな特徴である。

杉並中継所は、施設の写真を見てもらうとわかるように、半地下で大きな建物は見えない。半分はもぐった形になっていて、公園が近い。すり鉢上の下になっていて、空気がたまりやすい場所に中継所がある。場所は、杉並区と練馬区との区界にある。

この施設が稼動し始めた日から、周りの人の具合が悪くなかった。

中継所はごみを処理するのではなく、燃えないごみを圧縮する施設である。

燃えないごみは、プラスチックが半分以上な



のでかなり軽い。その状態のまま埋立地に持っていくと、軽いので空気を運ぶのと同じことになって効率が悪い。そこで、燃えないごみに圧力をかけて小さくする。そのための施設が杉並中継所である。

清掃車からごみを落とし、落としたところに圧力をかけて、コンテナに運ぶ。コンテナが埋立地に持つて行く。ただ単に圧力をかけて持っていく、単純な施設である。

中継所が大変なものだと知らずに、葬祭場か中継所の選択肢を迫られて、中継所を選んだ。その結果こういうことが起きた。

中継所の排気塔から外に出しているガスで、ガスがよく当たる木、植物が枯れる。議会でそのことを指摘すると、すぐに植え替えられたり芝生がきれいになったりするので、誰も何も言えない。

杉並病は人によって症状が違うのがやっかいなところである。それぞれその人の弱いところに症状が出る。例えば、水俣病であれば、みんな同じ症状が出たので公害病だとわかった。ところが、今の公害病は化学物質が関与していて、その化学物質も昔と違って多数、かつ複雑になっているので、人によって反応が違って出てしまう。

同じ生活をしていてもなぜか発症する人といしない人がいる。家族でも調子が悪くなる人と悪くならない人がいるし、目が痛い、せきが出る、めまい…人によって様々である。

こういう症状で病院に行くとストレスだと言われてしまう。そういう状態なので、これが杉並病という明確な症状は無くわかりにくい。

はっきりした特徴は、中継所から離れると調子が良くなることである。旅行などで離れたところに行くと、調子が良くなる。

杉並病は化学物質過敏症ではないかと言われているが、日本医師会では過敏症という病気を認めていない。シックハウス症候群は認めていた。シックハウス症候群は、ホルムアルデヒドの影響で具合が悪くなる病気である。それなのに、おおもとの化学物質過敏症はないと医師会は言い張っている。

日本では研究者が極端に少なくて、北里大学のみが研究している。世界では当たり前の病として

認められている。

人によって症状が違うのが特徴で、杉並病はこれに当てはまる。

例えば、ホルモン系に症状が出ると、胸が大きくなつて腫れて痛くなったり、女性であごにひげが生えたりする。皮膚が弱いと、涙が止まらない、粘膜がやられる、皮膚がただれるなどの症状になる。

植物には、例えば赤い斑点が出てくる。中継所の周りの家でガーデニングをすると植物が育たない、よく枯れると言われている。何でそうなるのかがはっきりしない。

化学物質に暴露した植物は独特の斑点が出たりするらしいが、杉並中継所の周りでははっきりわかっていない。

【杉並病闘いの歴史】

杉並病の発症は平成8年で、ずいぶん経っている。平成8年の中継所稼動時の瞬間から、健康被害が発生した。

中継所の周りの被害者から、なぜかわからないが中継所が動いた途端具合が悪い、おかしいと訴えがあって、当時は中継所が東京都の所管だったので杉並区も間に入って調査した。

平成11年に杉並区が調査し、中継所の周囲に住む人の症状を調べた。中継所に近いほど症状がきつい、という相関関係がデータからわかった。中継所と杉並病に因果関係があるということになったのである。

この発表で慌てたのは東京都。同じ行政機関である杉並区が杉並病と中継所が関係があると言ったことで、都の施設に文句を言われたことになり、都は慌ててしまった。

今までのように突っぱねるわけに行かなくなり、諮問委員会を設置した。

そして、平成12年、都より硫化水素説が発表された。同じ平成12年、杉並中継所は東京都から杉並区に移管された。行政施設は4月1日から移管される。硫化水素説が打ち出されたのは3月31日の午後3時だった。杉並区は反論できる時間がたつた2時間しかなかった。あつという間に翌日を迎えて、移管になってしまった。移管後、東京都は、

杉並中継所に関する資料をどっと捨てたと言っている。

杉並区は、中継所をもらったために立場が変わってしまった。最初は被害者の間に入つて東京都との調整をしていたが、今や施設の運営者となつてしまつたため、段々被害者との対立軸がでてきて、コミュニケーションがうまくいかなくなつてしまつた。

硫化水素とは、温泉地で出てくる物質で、卵が腐ったようなにおいがする。化学を知っている人なら、中継所の硫化水素説がいかにおかしいかがすぐにわかる。しかし、都は何がなんでもここに話を落としたかった。

中継所が稼動して半年間に発生した物質の中でたまたま硫化水素が多くて、水道局から文句を言われた。そこで、水槽を作つてろ過して出すように変えた。最初の半年間だけ硫化水素が流れて杉並病が起きたということにすれば誰も傷つかないで責任も取らなくていいと言うことで硫化水素説を作つた。

硫化水素説を打ち出したために、賠償金を払わないといけなくなった。平成13年に被害者が賠償金を求めたところ、硫化水素の被害ではないと言うことで全員の訴えが棄却されてしまった。東京都は、言つてのこととやつてることが全然合つていない。

その後、被害者が公害等調整委員会に訴えて、平成14年に裁判が下つた。「稼動から5ヶ月間は化学物質が原因で杉並病が起つた」と認めた内容である。最初の5ヶ月間は多くの被害者が被害を訴え、それ以降申し出る人が少なくなったので、国はこの病は5ヶ月で沈静化したという裁判を下した。

これは公害病でよくあることだが、最初はつらいので多くの人が訴えるが、行政に希望のない対応をされると被害を訴えることが辛くなる。被害を申し出ても家族などに被害が及ぶ。声を出せば地域に住みにくくなり、怖くて言えない雰囲気になつてくる。行政は人の心理を読まないので、最初の5ヶ月しか認めなかつた。化学物質だと認め

てくれただけ、良かった。

裁判後、化学物質が関与したことが認められたので半分は認められたという人と、5ヶ月間しか認められなかつたという人がいて反応が分かれつた。裁判に訴える人とそうではない人と、被害者が分かれてしまい、杉並病の運動も今は大きく二つに分かれてしまつて行われている。

今は、国の裁判を受けてどうしようかというところである。国が裁判を下して、最初の5ヶ月と認めたので、すっきりさわやか、いい顔をして杉並区の議員は議会にやって来る。しかし、これで終りではないぞと、思つてはいる。

【杉並病の原因物質は?】

杉並区は、杉並中継所のモニタリング調査を年に4回行つてゐる。中継所は異常がない施設であることを調査して、発表している。報告の最後の文章には、「異常がない」と必ず書かれている。

どの化学物質も環境基準値以下であるということを根拠として、異常がないと書いている。少し聞くとうかうかと思つてしまつ。しかし、濃度が問題である。濃度は簡単にコントロールできる。例えば、外から空気を吸い込んで薄めて足せば、簡単に濃度が変わる。私が議会で、濃度は何の根拠があるのかと尋ねると、役所の人が困つた顔をして、今は濃度しか比較のしようがないと言つた。環境基準は意外にいい加減ということである。環境基準値以下だから健康被害が起きない、とは断言できない。

大切なのは、一日にどれくらいの化学物質が排出されるかである。モニタリング調査のデータを計算し直してみると、面白い結果が出た。異常があるデータがたくさん出てきて、共同研究者と「同じデータを使ってなぜこんなに違う結果が出るのだろうか」と驚いた。

杉並区が測つてゐる物質の総量を図で示す。グラフがでこぼこしているのは、フィルターを交換すると減るからである。最初は、2年に1度しかフィルターを交換していなかつた。実はフィルターは1年でダメになるので、そのことを指摘したところ、1年に1回交換となつた。

総量をみて問題となるのは、グラフが一番高い時にどんな状態であったかということだ。この時に排出される物質の6割は、アセトアルデヒドであった。なぜアセトアルデヒドがたくさん出てくるのかが謎である。ピーク時には、1日に1,700人の致死量に当たる量が排出されていた。アセトアルデヒドだけで1,700人分なので、他の物質も混じればすごいことになる。

アルデヒド系の物質が、中継所から本当に出ているのかどうかを調べた。濃度と排出量の回帰関係を調べたところ、ホルムアルデヒドは重相関係数R²=0.8で、排出量が多いときほど中継所からたくさん出ている。アセトアルデヒドもR²=0.6で、中継所との相関関係が高い。

都が杉並病の原因物質だとした硫化水素について調べたところ、R²=0.17で、中継所から排出されているとはとても言えない。よく話題になるダイオキシンは、中継所からは全然出ていなかった。

【圧縮という行為との因果関係?】

なぜ、アセトアルデヒドが出てくるのか。これは圧縮という行為に関係があるのではないかと私は考えた。

プラスチックは炭素結合からできている。圧力をかけることによって、化学式の結合の末端が切れて、空気中の酸素と反応し、CHO(アルデヒド)になったのではないかと考えている。

物理的に圧力をかけることで化学式の末端が切れてアルデヒドが生まれるという仮説が成り立つとすると、圧縮という行為がアセトアルデヒドの発生に関係あると考えられる。では、圧縮はどこで行われるのか? 中継所と清掃車の中である。ごみを集めるとときには、ごみを投げ入れてモーターで内側に入れている。あの段階で圧力がかかって圧縮される。

そこで、清掃車の中を調べたほうがいいと議会で言った。清掃車からガスが多く出ているのであれば、これは杉並区に限った病気ではない。杉並病という名前がついているが、燃えないごみに圧力をかけることで起こる病、化学物質を撒き散らすことで起こる病ではないかという仮説が成り立つ。その後区長からメールが来て、調べてみると

いう返事があった。

3台の清掃車の中から出てきたアセトアルデヒドの量をグラフで示すと、多いときで室内空気指針の16倍以上のアセトアルデヒドが出ていた。杉並区はデータが出てきて泡を食ってしまった。サンプル数が少ないので数を多くして、今調べてもらっている。

以上が杉並病の話である。

杉並病についてしつこく議会で言うのは、私だけになってしまった。

今、清掃車がもしかしたら?、ということになっている。そうなると、中継所の問題だけではなくて、もう杉並区の手に負えない。清掃車が原因であるとすれば、東京都や国に対して、燃えないごみの処理の仕方を根本から考えないとダメだ、プラスチック系のごみを調べることが大切だと言った。清掃車を調べて、アルデヒドの発生源を調べたほうがいい。その研究の費用は杉並区だけでは捻出できないので、都や国から出してもらうよう主張すべきだと考えている。

フィルターを通して化学物質が減ると言われているが、増える物質もある。

フィルターは万能ではない。例えば、ジクロロメタンはフィルターを通す前に130だったのが、通した後は300になる。空気を汚くするためにフィルターを通しているようなものだ。雑学として、こうしたことでも覚えておいてもらえば、と思う。

【杉並病を解決するために、生み出された「レジ袋税】

杉並病解決に向けて杉並区はどう考えたかということで、レジ袋税の話に移る。

プラスチックの削減が必要だと杉並区は思った。そこで、レジ袋で税を導入しようと考えた。10年後、杉並中継所を廃止することを区長が約束した。10年後に廃止するためには、ごみの量が減っていないといけない。そのために、区民に動機付けをして、ごみを減らしていくことを考えたわけである。

レジ袋税とはどんなものか。税は事業者が徴収し、消費者が払う。店頭で5円払わないと袋がもらえず、その5円は役所が持っていく。税金を払う消費者には拒否する権利がある。事業者にとってはきつい。ある日突然、袋に対して5円をお客さんからもらわないといけない。別の区だったら言わわれないように杉並だと取られる、と言われる。お客さんに嫌われたり文句を言われたりするし、納税手続きも大変で、事業者にとっては得がない。

レジ袋税の案を打ち出すと、賛成派と反対派の対立が始まった。

賛成派は環境意識を高めるのに必要だと主張し、反対派は税収を上げるためにやっているんだろう、と真っ向から対立した。

レジ袋税が不幸だったのは、東京都の外形標準課税の打ち出しと重なったことだ。東京都が外形標準課税で杉並はレジ袋税、と新聞などで話題になった。

議会もちょうど半々になるくらいもめにもめた。通常提案があって期間中に必ず結論を出しが、会期中に結論が出ず次回の議会まで延ばした。区長の机には反対派から山のように手紙が来た。それくらい白熱した状態になった。

すったもんだがあって、最終的には、2度目の議会で議案が通った。

区長は、商いをさせていただくのは世の中にいいことをしようと思っているからだ。だが、レジ袋を使って環境にいいことだと思うか、本来の商売道から外れているのではないか、と事業者を説得していった。

可決の時に、このまま強行突破で税をかけるのはあまり良くないと思った。無理やり税をかけて、他の環境政策を支持してもらえないといつも困る。まずレジ袋削減をやってみてはどうか、と提案した。レジ袋削減目標と達成時期を決めて、目標が達成できたら税を施行しない、達成できなければ税を施行する、という提案をした。

【杉並区の現状(マイバッグ持参率は?)】

現段階では、杉並区はレジ袋税をかけていない。杉並区はレジ袋不使用者の目標を、平成14年に

25%、平成15年に33%、平成19年に60%とした。実際には、マイバッグ持参率は28%台で伸びなくなってしまった。

杉並区は一生懸命マイバッグ運動をやっているが、踊り場状態になっている。

レジ袋削減のためのマイバッグポスターを紹介する(実物提示)。どうでしょうか?(会場から笑い)

どういう意図でポスターを作っているのか、担当部署に尋ねた。区民の評判はどうかと尋ねると、あまり評判が良くないと答えがあった…。

イメージを悪くするポスターはぜひ排除してほしい。デザイナーに発注する役所の対応が悪い。意図をきちんと伝えずに丸投げするから、現在のようなセンスのないポスターになるのではないか。なお、今年から区役所は、広報の勉強会をやっている。

行政広報のいい例として、浦安市のビーナス計画を紹介する。まずビーナス計画は何かを示し、次にリサイクル、清掃に関するものであることを、少しづつ情報量を増やし、センスよく伝えていった。これを見て、杉並区役所にはとてもショックだったようだ。

マイバッグキャンペーンは、杉並区は上手ではない。

現在は、マイバッグを持っていくと、代わりにエコシールがもらえる。参加は、たくさんお店がある中でたった900店舗で、流通も18万枚なので、うまくいっていない。

行政が補助金を出す施策は失敗する。区民の発案であればいいのだが、行政が押し付けたアイデアはうまくいかない。

杉並区は、今困っている。

いよいよレジ袋税を試行すべきか? そうなると反対派がくすぶり始める。

委員会のときに、いつのこと自分たちの惨状を区民に訴えてはどうか? と発言した。行政機関はいつも答えを出していつも正解で、が多かったのだが、そんなことは無理だ。アイデアがないので助けてください、と訴えてはどうかと提案した。

区役所は考え直して、「皆さんのお知恵を～」の区の広報紙に書いている。

循環研にも、ぜひアイデアを出してほしい。

【相反する東京都の方針】

プラスチックで発電を、と東京都はプラスチックで発電をする（燃やそうとしている）ことを明確に打ち出している。現在は炭酸カルシウム入りのごみ袋でなければごみを出せないが、今年の12月から炭酸カルシウムが入っていない袋でもよくなる。普通のビニールも燃えるごみで出してもいいようにして、最終的には、プラスチックを全て燃やすつもりでいる。言い分として、炭酸カルシウムは温度を下げないので炉を傷めないとすることを掲げている。埋め立てスペースがなくなってきたので、燃やしてしまえという方向に変わってきた。都は全てを燃やす方向へ第1ステップを歩みだした。

では、杉並区はどうか？ 杉並区はレジ袋税という条例を持っている。都の方針に照らすと、燃やすごみまで税金をかけることになってしまう。都に引っ張られるのか？ レジ袋税を施行するということは、つまりレジ袋を燃やさないごみとする方向に一歩踏み出しているのと同じである。これでは、都の方針と反してしまう。

【どうなる「レジ袋税」？】

ごみを燃やす方策をとるのか、燃やさない方策をとるのか？ どちらをとるのか、杉並区は決断を迫られている。

レジ袋税でもめたときには、誰も将来のことを考えていなかったので、このことではもめなかつた。しかし、東京都がこのような発表をすると、杉並区もどうするか真剣に考えないといけない状況になってきた。燃やすならレジ袋税を捨てなければならない。レジ袋税を考える、レジ袋を燃やさないなら、その方向へ一歩踏み出すべきである。

次の議会で、このことについて質問、提案することを考えている。

レジ袋税をどうすればいいか？ 皆さんなりに考えて、7月下旬に杉並区役所に提案してくれたら

嬉しい。

【参加者との質疑応答】

Q. 中継所の近くに住んでいる。杉並病を考える会の関係者の話を聞いていて、運動は落ち着いた感じなので、話題にならなくなってきたと感じる。病気は沈静化しているのか？

A. していない。

Q. ごみの排出量は低下しているのか？

A. 変わっていない。杉並区の量は減っているが、練馬区、中野区のごみも処理を引き受けている、杉並が減った分、2区の受け取る量が増えたので、ほとんど変わっていない。

化学物質は減っている。最初はフィルターをつけていなかったが、その後被害が出てつけるようになって、2年交換が1年交換になった。フィルターは対処療法でしかない。根本的に何が原因かを突き止めなくてはいけない。杉並病の原因はずっと残っている。

Q. 量的にどのくらい減っているのか、データはあるのか？

A. 杉並中継所が杉並区に移管されてからはデータを取っているが、平成8年の稼動時からのデータを、都は取っていないため、比較のしようがない。中継所ができた当初にどれくらいの排出量が出ていたかは、わからない。

今日示してきた排出量は、フィルターをかけた後のもの。フィルターをかける前は、ものすごい量が出ていたはず。中継所ができたときには、そのままの（処理されない）空気が出ていた。

Q. 当時と比較すると排出量は減ったが、あまり状況は変わっていないのか？

A. あまり変わっていない。被害を訴える人は少なくなってはいるが、決して被害者がいなくなつたわけではない。

Q. 杉並区のごみの分別の仕方はどうなっているか？

A. 燃えるごみ、燃えないごみ、資源ごみ。23区と同じ。廃プラスチックのモデル回収をしている。

その横で東京都がプラスチックを燃やすと言っているから、おかしい。

Q. 自分が住んでいるところは、プラスチックだけを回収している。そうすれば大分違うのでは？

A. トレイ、ペットボトルは行政が集めている。燃えるごみ、燃えないごみという区分は日本だけである。世界は、リサイクルできる、できないの区分がスタンダードとなっている。

ごみは燃やさない方がいいと私は議会で言ってきた。ごみを燃やさない方法を考えるべきである。

Q. グラフの下の線は何か？

A. 主要な7つの物質だけを集めたものの排出量で、上が合計の排出量である。

Q. フィルターには何が引っかかっているかを、杉並区は調べていないのか？

A. 杉並区は調べていない。

コメント

ちゃんと調べるべきである。自分も残念な体験を持っている。1970年に海洋汚染の国際会議があって、固形物質が海洋の生態系に悪影響があるという議論があった。死んだウミガメの腹を裂いてみたら、ビニールなどが出てきたという話をした。議長の大先生に「What a nonsense！」と言われた。「実際に死んでいるんだから悪影響があるんだ」と言ったら、「何に書いてある？」と聞かれた。「新聞だ」と答えたら、「新聞は科学文献ではない」と言われた。学者の間では、Natureなどではないと文献とは認められていなかった。

90年代にNatureを見たらこのことが扱わっていた。

既存の科学者は現実を認めない。

Q. 資源がもったいないからごみを減らそう、との呼びかけが多いが、実際には健康への被害を訴えるべきでは？

A. レジ袋を飲んだイルカのお腹の写真は広報で紹介した。実際の環境の害を訴えていかないと、何でレジ袋を減らすのかがびんと来ない。

Q. 健康被害を訴えられない、できない理由は？

A. 清掃車からガスが出るというデータが出てきた。区長は、このデータをたくさんとて、東京都や国に物を申していこうとしている。杉並区役所も今の区長のいるうちに問題提起をしないと、杉並病が風化してしまって、違う地域で同じ問題が出てきたときに水俣病の運命をたどってしまうよ、と行政の尻を叩いている状況である。

それに対してもどんどん提案して欲しい。

Q. 区長が10年後を中継所を廃止すると話をしたが、いつか？

A. 国の裁定が下りたとき、すなわち一昨年（平成14年）から10年後。

Q. 実際に中継所を廃止できる可能性はあるのか？

A. めどは経っていない。清掃局が高井戸にあって、ごみを燃やしている。安易な方法で溶融炉にしてしまって、そこで燃えないごみをまとめて燃やそうという方法が怖い。ごみを燃やさない選択肢を考えるべきだ。今、軸足は溶融炉に向いている。溶融炉を作りリサイクルはありえない。

コメント

一番恐ろしいことがじりじり起きている。杉並区だけではない。プラスチックによる化学物質は色々ある。一つ一つの害だけではなく、複合汚染になっている。

環境汚染を一つの原因として、脳の発育異常が起ころっている。正常な神経のネットワークができていない、欠陥状態ができると言われている。

単なる化学物質過敏症ではない。あらゆる物質が体内に入ってきてまずやられるのは神経、次に免疫異常、最後にホルモン異常。これら三つがうまく機能しないと生きていけない。生命力そのものが落ちている。

疲れやすい、病気が治りにくい、がんが増える。今一番心配しているのは子どもたちの問題。性格が変わっている。明らかに集中力がなくなっている。また、大人も子どもに当たっていく。

これらは杉並だけではなく日本人全体の問題で、その中にかなり環境汚染が影響していると思

う。教育、しつけのほか色々あるが、環境による影響は大きい。世界の学者が言っているが日本の学者は全然認めない。

プラスチックを止めることはできない。危険なものと安全なものを分類しないといけない。無駄にプラスチックを使わないこと、これが一番大事である。できるだけ無駄に使わないことを考えないと、日本の環境は時々刻々とだめになっていく。

Q.住民の被害があったというが、清掃車職員や中継所職員に異常は出ているのか？

A.出でていない。異常がないから大丈夫と役所は言うけれど、たまたま具合が悪くなった人は早く辞めていると思う。今健康だからO.K.とはならない。職員の具合が悪いかどうかは問題にならないと思う。

Q.レジ袋が目のかたきにされているが、生ごみを入れるのにレジ袋を便利に使っている。

私が住んでいる市は分別が徹底している。生ごみ、リサイクルできるもの、プラスチック、びんとかん…。初めは面倒くさかったがいいことだと思うようになった。

レジ袋をそれなりに燃やしている。

A.道端にレジ袋を多く出されていて、清掃車はそれらを回収している。

使用している目的を残して啓蒙しても、無理ではないか。燃やすごみにレジ袋を出さないでと明確に言ってはどうか。言っていることとやっていることが矛盾している。

住民はこうした論理矛盾をわかっていて、それがマイバッグ普及率28%につながっているのではないか。

Q.マイバッグを使っていたら、商品を盗んだと間違えられたことがある。

A.最近はそれなくなってきた。杉並区内では、袋に入れるかどうか声を掛けてくれるのは当たり前になってきたが、まだまだだ。

Q.杉並病とレジ袋税は、1対1の関係ではないのか？

A.1対1ではない。但し、動機付けとして杉並病

の影響は大きいのは事実である。

Q.レジ袋税は、外形標準課税を見習ったのではないか？

A.外形標準課税説の影響はないとは言えない。

レジ袋はごみの量としては少ない。何でそんな少いごみに注目して大騒ぎをするのだと言われるが、世界中で見ていると、生活に近くてちょっと意識すれば使わなくて済むので、レジ袋を環境政策（有料化、税金等導入）に使っているところが意外に多い。

例えば、台湾では今、レジ袋が全面禁止になっている。視察に行ったときに、「レジ袋の全面禁止でレジ袋業者はどうなるか？」と尋ねると、行政関係者が「そんなのはかまわない。業者に廃業してもらう」と答えていて、大胆なことを言うな、行政の力が強いので日本と違うのだと思っていた。

その後ニュースで台湾のレジ袋税のことが取り上げられている映像を見ると、業者のデモ行進が行われていた。「廃業しろというのか」、というプラカードが立てられていて、視察でインタビューした人が「こんなことになるとは…」と答えていた(笑)。

どこの国にも事情はあるが、杉並区という行政区域だけでレジ袋税を導入しようとしているのは、世界でも杉並区だけで、世界中から視察に来ているそうだ。

Q.渡嘉敷さんはレジ袋税に賛成か？

A.最初から賛成している。最初から最後まで、賛成の意志を貫徹したのは4人だけだった。

Q.我々には、何を求めているのか？施行しない方法なのか？

A.個人的にはプランを持っているので、議会で提案する。

ここでは、最終ゴールである環境意識向上のために、この施策をどう使えばいいかを、皆さんに自由に考えてほしい。

循環研・循環ワーカー養成基礎講座

第一回

「生態系と循環型社会—調和と平衡をキーワードに—」

講師：三島次郎先生（桜美林大学名誉教授）

日時：2004年6月4日 18:30～20:30

会場：ノルドスペース セミナールーム（東京都中央区京橋1-9-10 フォレストタワー）

今日は、いわゆる生態系、エコシステムとは何か、あるいは循環型社会とは何か、このようなことも含めて、大きな話からさせていただきたい。まずは、頭の中を真っ白にして聞いていただき、私の話を聞いた後、みなさんには「はてな」と思っていただければ、今回の話は十分成功したということにさせていただきたいと思います。

1.はじめに 作られた地球

私たちの周りには、いわゆる自然がたくさんあるはずです。

今から15年ほど前、アメリカのイエローストーンという有名な国立公園で、雷が原因と聞きましたが、山火事が起こりました。燃え広がったとき、周りから消防自動車が駆けつけました。しかし、レンジャーはゲートを閉ざして、消火活動を許しませんでした。その結果、すごい山火事になり、一ヶ月二ヶ月と燃え続け、東京都と神奈川県をあわせたくらいの面積の森林が焼失しました。

日本でも報道されたのでご記憶の方もいらっしゃるかもしれません、アメリカ中の世論が沸騰しました。なぜ火を消さなかったのか、もっと早く火を消せば、こんな大惨事にならなくともすんだのに。これに対し、レンジャーたちはパンフレットを作り、火を消さなかった科学的な理由をあげ、そして、最後にびっくりするような結論を出した。私たちは自然を大切にしたんだ、火事も自然のうちである、という結論です。おやつと思われる方がおられるかもしれませんので、ここにその科学的な理由をいくつか示したいと思います。

①過去に何回も火事があったことを示す炭の層

▶地面を掘ってみると、炭の層をみることができます。つまり、過去に何回も山火事は起こっていて、生き物たちは何回も経験している。

②草原から森への遷移、森の動物と草原の動物

▶エコロジカルサクセッション（生態遷移）と呼ばれる。イエローストーンの草原には、たくさんの草食動物が住んでいる。たとえば、絶滅しそうなアメリカバイソン、あるいはエルク（大角鹿）、冬になるとトナカイがやってくる。また森には森の動物たちがいる。レンジャーは、森の動物にも、草原の動物にも、特に応援することはないと考えたのです。1990年にイエローストーンを訪れたときに、燃えた後には、草が芽生え、かつて森だったところで草食動物たちが摂食しているのを見ることができた。

③火事によって開く、ロッジポール松の松ぼっくり

▶イエローストーンの主要な木であるロッジポール松には、松ぼっくりができるが、秋が来ても、冬が来ても、来年の春が来ても、それは開かない。いつ開くかと言えば、火事がやってきてあぶられ、熱くなって、そして火が消えた頃、松ぼっくりが開いて、たくさんの種を散布します。オーストラリアのユーカリの木の仲間に似たような性質のものもあるし、煙を吸わなければ芽が出ないという種子があることも最近は知られている。こうすることを考えると、ロッジポール松には、遺伝子の中にちゃんと火事に備える準備ができているということがわかる。従って火事はびっくりすることではなく、ある種の環境の一部と受けることができるのだろう。

④陽樹林（白樺、赤松、ロッジポール松など）から陰樹林（白神山地のブナ、椎、櫻の仲間など）へ

▶陽樹というのは種が明るいところで芽生え、

明るいところで育つもの。これに対し、暗い森の下のところでも大きくなることができる木を陰樹という。ロッジポール松は陽樹だが、数百年経てば、陰樹が育ってきて、やがて森は陰樹の森に変わってしまうだろう。ところが火事が来て、そこに種子をばらまいておけば、次の世代もまたロッジポール松が占領する森にできる。植物同士の競争と火事、火事をうまく利用して生存をはかる、こういうストラテジー、作戦がちゃんとできあがっているのである。

これは、日本で山火事が起きたらどうすればいいかということを言っているのではありません。もしあなたが、森林保安官（レンジャー）だったら、ということを考えてみてください。山火事が起きれば、火を消せ、ということになるでしょう。これはある意味で、常識です。しかし今の話を聞いた後なら、さて、この火事は、大切に燃やした方がいいのかも知れない、と考える。このように首をひねることができる、その差は何かというと、自然の法則、あなたがこれを知っているかどうかです。これによって、火事を消すか消さないか、このような判断が180度違う場合もある、ということをまず記憶にとどめておいてください。生物学的自然についての科学、生態学（Ecology）についても、耳を傾けて、あるいは目を向けていただきたいと思います。

さて、ちょっと復習してみましょう。いくつかの単語が出てきましたが、それは次の通りです。

(生態)遷移 Ecological Succession

陰樹と陽樹 Shade Bearing Tree / Intolerant Tree

動物の食性 Food Habit

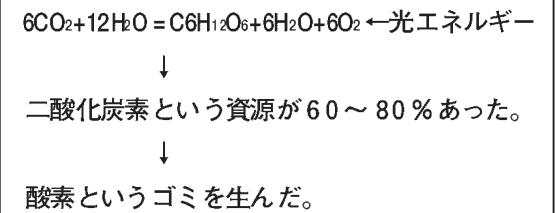
生活場所 Habitat

適応 Adaptation

今度は、ものすごく昔の話をさせていただきましょう。気の遠くなるような昔ですが、34億6千500万年前のお話です。地球が誕生したのが45億か46億年ほど前。表面の温度が冷えてくると、水

蒸気が水となり、雨となって降り続き、やがて水に覆われた地球が誕生しました。海の深いところで、いくつかの元素が複雑に結びついて、DNA、あるいはRNA、いくつかの原始生命体のようなものが生まれ、進化発展して生き物ができあがったのだろう、と言われています。原始生命体とは、今で言えばバクテリアみたいなものと思ってくださいって結構です。水をバリアにして、海の底で宇宙からの放射線を避け、静かにひっそりと、そして種が分化して、多くの種類のたくさんのバクテリアが生まれ、地球の海の底にひしめくような状態が何億年も続きました。

そのうち、海の表面の方まで出てくるという冒険をするようなバクテリアが出現しました。その生き物は、シアノバクテリアと呼ばれます。このシアノバクテリアは何をしたかというと、



二酸化炭素と水を化合させ、それには光エネルギーが必要としますが、ブドウ糖を作り出しました。そして、水と酸素を放出します。どこかで見たことがあるような化学式かも知れませんが、このことを、炭酸同化作用と言い、今でもすべての緑の植物たちがやっている最も大切な化学反応といわれています。このシアノバクテリアは最初に炭酸同化を始めました。

当時、34億年ほど前の地球の上では、なんと60%～80%もの二酸化炭素が存在していました。つまりシアノバクテリアにとっては、沢山の水と、沢山の二酸化炭素に恵まれていたわけで、ものすごい勢いで繁殖を始めました。そして、酸素を出しました。

しかし、酸素というのは、有毒な物質であり、私たちの体の中でも、酸素の形によっては悪さをします。この酸素が放出されて、どういうことが

起きたでしょう。

地球上の海は、倍々で増えるシアノバクテリアで満ち溢れるようになるまでに、それほど時間はかからなかったと考えられます。そして、酸素を嫌う「嫌気性バクテリアの大絶滅」があったに違いないと言うことです。他の生物を危険に陥れたのは、何も30数億年後の21世紀の人類だけではありません。シアノバクテリアの放出した酸素によって、多くのバクテリアが死に、環境の悪化が続いたことでしょう。

さて、もしこのままなら、どうなったでしょうか。その証拠に、30数億年たった現在、地球上には、なんと0.03数%という量の二酸化炭素しか残っていません。誰がそんなに炭酸ガスをどっかにやってしまったのかというと、シアノバクテリアだけではないですが、それに続く植物たちが徹底的に二酸化炭素という資源を使い果たしました。

今、私たちは地球温暖化に関して、0.034%とか0.035%という桁で、戦々恐々としていますが、どんなに大きな変動が生物によって地球にもたらされたかということです。そして、だんだん炭酸ガスがなくなれば、シアノバクテリアはどうなってしまうでしょう。二酸化炭素という資源を使い果たし絶滅もしかねません。

そのシアノバクテリアを、滅亡から救ったのは、シアノバクテリアを食べる動物です。バクテリアの仲間なのでこの表現は当たらないかも知れませんが、そういうバクテリアが現れて、シアノバクテリアを食べ始めた。そして反応の逆、二酸化炭素と水を作り出す、ちょうど私たちがやっているようなことを行う動物が現れたわけです。動物が植物を救ったのです。ちょっと極端な言い方かも知れませんが、敵もまた味方、地球共生系というものが始まつたということになります。

「不可欠な循環」、例えば炭素の循環みたいな系列は、もうすでに30数億年前に出来上がったと考えてください。

オオカミはトナカイを救うという話があります。アメリカの生態学者が、30年くらい前にやったことですが、アリューシャン列島のセントマシユース島へ、大陸からトナカイを何頭か持ってきてました。敵のいない島の中で、どんどん数を増やしていました。大体、200頭分ほどの冬の食料は生成されますが、それを超えたら、なくなってしまいます。冬の中頃に、すべての食物を食べ尽くし、トナカイは全滅してしまいました。

ここにオオカミを放すと、どうなるでしょうか。オオカミはトナカイを食べてしまいます。数のバランスによりますが、少なくともオオカミがいれば、トナカイは、この島でもっと長い間繁栄を続けていけたでしょう。

ちょっと話は横道にそれますが、オーストラリアの西海岸にパースという町があり、そこから北へ600kmほど行ったところにハメリングプールというきれいな海岸があります。海の中に入つみると、ストロマトライト、シアノバクテリアのコロニーを見るできます。今も酸素を生成しているのです。その直系の仲間には、「アオコ」があります。酸素を作り、有機物を吸収するという働きで、一般の植物とよく似ていると言えます。

(以下省略。以下の内容にご関心がお有りの方は、循環ワーカー養成基礎講座記録をご覧ください。尚、この記録は、事務局・古賀が記録し、三島氏に加筆修正いただいたものです。)

循環研フィールドワーク報告

「レジ袋税を施行すべきか否か、提言前の現場視察」

【案内】 観察案内：杉並区役所区民生活部生活経済課長 井山 利秋 氏

観察調整：杉並区議会議員 とかしき なおみ 氏

【日時】 2004年6月25日（金） 9:00～16:30

【スケジュール】 9:00～10:00 レジ袋について説明（杉並区役所内 中棟4階理事者控え室）

10:30～11:30 杉並中継所&杉並病被害者宅写真展見学

13:30～15:00 杉並清掃工場見学

15:15～15:45 萩窪オーケーストアにてレジ袋有料化見学

16:00～16:30 阿佐ヶ谷すずらん通り 紙袋への変更運動、エコシール事業

「レジ袋税をどのように扱ったら、本当の区民の環境意識が高まるか」をテーマに、ゴミを処理している焼却所、中継所、レジ袋削減運動を頑張っている商店街、レジ袋有料化を勧めているスーパーなどの視察を行いました。

朝9時、小雨の降るなか、レジ袋についての説明を受けるために、杉並区役所内の会議室に参加者16人が集まりました。渡嘉敷議員の挨拶に続き、区民生活部生活経済課の井山様から環境目的税について説明いただきました。「『レジ袋税』については、区民の75%が知っているにもかかわらず、実践しているのは28%。一方で、レジ袋を有料化しているスーパー（OKストア）では、削減率が9割と行動に結びついている。このギャップが分からぬ。事業者、消費者がこの問題をどのように考えているのか、逆に教えて欲しい。」上着を脱ぎながら、熱くご説明いただいたのが印象的でした。



写真1：杉並区役所での説明・意見交換（写真左が説明頂いた井山様）

説明のあと質疑応答が行われ、10時過ぎには杉



写真2：ここがホッパー（投入口）。分別されていないゴミが目立ちました。

並中継所に見学に行くために一同、バスに乗り込みました。10時25分（渡嘉敷さんの時間管理の妙！）、予定の時刻に間に合うように中継所着。

杉並中継所では、まず中継所について説明を受けました。中継所とは「収集車で集めた不燃ゴミを大型コンテナに積み替えて、中間処理を行う不燃ゴミ処理センターに輸送するための施設（杉並中継所パンフレットより）」であり、杉並区の不燃ゴミの全量と、練馬区、中野区から発生する不燃ゴミのそれぞれ2/3、1/5が搬入され、その量は1日180トンだそうです。

続いて、ゴミ処理の流れに従い、施設を見学しました。24時間ファンが稼働しているにもかかわらず、かなりの臭気。ゴミを投入するホッパーの上部には集塵装置とファンが取り付けられているとのことでしたが、やはり・・・

その後、コンパクター、汚水処理装置と見学していましたが、その労働環境は壁に掛けられていた温湿度計が熱中症危険ラインを超えるほど。働いている方は「今日はまだまですよ、慣れる

と大丈夫」とおっしゃっていましたが、これにあの臭気のことを考えるとまともな労働条件でないのは確かです。働いている方も一方で被害者。問題が起こっている現場に加害者がいない、こうした状況は日本全国至る所で起こっていることなのでしょうか。



写真3：左がごみバンカ（貯蔵施設）。右に並んでいるホッパーにごみを投入して燃焼します。

11:30過ぎ、杉並病の被害者である斎藤さんのお宅にお邪魔しました。お宅の地下室や階段には撮り続けた写真が飾られており、名付けて「夢のユートピア写真展会場」。その地下室で写真を見ながら、杉並病の被害、ご自身の体験を涙ながらに説明いただきました。（この斎藤さんの涙に対して、循環研として何ができるのでしょうか・・・「ゴミを減らさないといけない」という気の長い話ではなく・・・）

食事をし、次ぎに訪れたのは杉並清掃工場。ここはその建設のいきさつ（*）もあり、環境への配慮が行き届いており、全国自治体清掃工場で初のISO14001認証を取得しています。そのせいなのか、中継所の職員の方とは違い、自信を持って案内いただいているように思いました。同じ区にあるごみ処理施設。どうしてここまで意識の差が生まれるのでしょうか。

* 清掃工場建設にあたっての環境への配慮

- ① 低い器のなかで騒音が漏れないように、地盤を10m下げる。
(半地下式清掃工場)
- ② それに加え、ごみクレーンなどの形状に配慮し、建物の高さをなるべく低くする。
- ③ 環八下にトンネルを通し、周辺地域に清掃車の出入りによる渋滞を引き起こさないようにする。
- ④ 構内に1万本の樹木を植えるとともに、建物の色彩を工夫する。

テーマをレジ袋に絞り、見学が続きます。15:30、OKストア荻窪店に予定どおり（！）到着。ここでは、レジ袋を有料化しており、削減率はなんと9割・・・との説明でした。見ていると、確かにマイバッグを持参している方が多かったのですが、かわりに無料のビニール袋の使用量が多いような気がしました。マイバッグを汚したくないとのことでしょう。ビニール袋の使用量も含めて、調べてみたいものです。もう一つ感じたのは、OKストアは商品そのものの価格が安く、それだけで他より競争力があるという点。マイバッグを持ってまで、OKストアに行きたいと思わせる魅力がそこにあるから、お客様が離れないのではないかでしょうか。

次は、このツアーの最終目的地、阿佐ヶ谷すずらん通り。お話を伺ったのは商店街振興組合理事長の筒井様。紙袋への変更運動、マイバッグ、エコシール事業などについてご説明いただきました。途中、商店街を歩いておられたお母さんに「いったい何の団体？」と不信がられてしまいました。お母さんの日常空間に突如現れた黒い軍團。確かに違和感がありました。お母さん、お騒がせしてすみませんでした。



写真4：すずらん通りで用意されていた紙袋



写真5：こちらは買い物袋。都内8つの「すずらん通り」で販売されており、今までに2万個が売れているそうです。

約7時間、計6箇所もの見学ツアー。このようにスムーズに回ることができたのは杉並区役所のみなさま、見学先のみなさま、そして渡嘉敷さんのご協力があつたことです。大変お世話になりました。ありがとうございました。あとは、ここからどのような提案を組み立てていくか。それは私も含め、会員のみなさんにかかっています。

（会員：松本 聰）

ワークショップ活動報告

▶エネルギーワークショップの活動報告

このワークショップでは3月3日の会合から「木質バイオマスを活用したエコ・コミュニティのプロジェクト研究」を始めました。研究の内容は循環研通信第8号に記載のように、各地・各所の検討状況や事例の調査、需要原単位や供給施設・技術の研究、幾つかのモデルについてのエネルギー需給シミュレーション、更にコミュニティ一促進策の検討など広範囲です。

以下に3月以降の研究状況を報告します。

【1】各地・各所の検討状況

- 経済産業省が行なっている新エネルギー関係支援事業について個別事例の調査を進めています。
- (イ) 地域新エネルギービジョン策定事業
- (ロ) バイオマス等未利用エネルギー実証試験事業
- 経済産業省と環境省が進めている19地区のエコタウン事業からエコ・コミュニティー形成上の課題を研究しています。
- 木質バイオマス利用が先進しているスウェーデン
- ベクショーマーの事例を学習しました。

【2】エネルギー需給の分析

- 木質バイオマスのマテリアルフローを分析し、現状での各種リサイクルの課題・陥路事項を研究しました。
- エネルギー転換利用の各種パターンについて総括的な比較を行い、エコ・コミュニティーとしての活用の適否を論じました。

【3】検討モデルの設定

- タウンモデル、ビレッジモデル、集合住宅モデルについて検討することにし、居住者規模、公的施設や商業施設の内容、農林・工業施設の内容を仮設定しました。今後【1】の事例調査によって具体的な研究を進めることにしています。

【4】コミュニティー促進策の研究

- 地域通貨や市民出資などの市場経済的な促進策について研究を始めました。

(エネルギーWSリーダー 荒川忠男)

▶水循環ワークショップ報告

四次元の水循環（表流水に片寄らず地下水、雨水のタテ軸と子孫への時間軸を考える）をめざす私たちのワークショップは、昨年度のセミナーを中心から今年度は水行政の動きが急なため、その対応が始まりました。

1. 「水道ビジョン」への意見具申

(1) 本年3月「水道ビジョン案」(厚生労働省水道課を事務局として向う10年視野の日本水道のあり方を策定するもの)につき、昨年来審議されてきた策定委員会の原案への意見公募が行なわれました。当ワークショップとしては、急ぎ意見をとりまとめ、4月末意見書として提出しました。提出意見内容は、嶋津暉之氏、久米谷理事などの論議、尽力を経たもので(循環研ホームページ所載)、およその骨子は次の通り。

- ①水道水源をヨーロッパに比べダム、河川、湖沼等表流水に過剰に依存し、水質悪化を招いた認識を示すこと。
- ②安全でおいしく、環境保全としての地下水涵養、地下水位の管理、地下水有効利用の必要性への言及と推進目標を明示して欲しい。
- ③災害対策としての分散型地下水利用水道の普及促進の記述を。
- ④行政と水道事業者団体のためのビジョンでなく、国民、利用者とのコミュニケーション推進に積極記述を。

(2) これに対し、委員会の整理は全国の意見を176項に整理した対応一覧が示されました。私たちの意見は4つの項で取上げられ、2箇所の修正対応がありました。但し、私たちの主眼とした地下水利用(タテ循環)は、「水道問題でなく、一義的には環境問題」であるとかわされ、「地下水と表流水との最適取水計画の検討が必要」とした最終版が6月1日付で公表されました。

2. 中央防災会議への意見具申

(1) 上記(1)の③と同様の趣旨での意見具申を企業市民の形で、内閣府防災担当大臣の管掌する中央防災会議「民間と市場の力を活かした防災力向上に関する専門調査会」の公募に応じ提出し

ました。(最終とりまとめは8月末刊明見込み)

(2) ちなみにこれに先立ち同会席上委員から地下水利用専用水道モデルシステムが発表紹介されました。

3. その他地下水活用をめぐる動き

(1) 学術専門家では、東京大学環境安全研究センター長の山本和夫教授の主宰する土木学会高度水処理システム小委員会がウェルシ社地下水自営水道システムをとり上げ、実地見学を含めた説明会が5月に全国の専門家35名で行なわれ、今後の有力モデルとして論議評価されました。また8月には、東京大学のみの戦略研究の一環としての「都市の水(特に地下水)マネジメント研究会」が都市工学科、地下水水理、水文、防災、環境、土木等の研究者10~15名で同様見学、研究会を行う予定。

(2) マスコミの動き

この4~7月に関西のNHKなどTV2局と読売(関西夕刊トップ)、朝日(関東版、私たちのワークショップ指導者の榎井教授談話掲載)等一般紙、水道業界紙等10回以上のマスコミ報道が水道局水道「対」地下水利用民営水道の構図で行なわれました。私たちは対立ではなく、自家発電のように市民需要者のための「補完と分散多様化」を理解してもらうことが大切と考えますが、会員皆様の御意見をお待ちします。

(水循環WSリーダー 川原啓佑)

▶エココミュニティワークショップ報告

現在、地域循環型社会の事例研究に取り組んでいます。

各種既存資料から、地域循環型社会のモデルになりそうな20事例を抽出し、その内容について詳細なケーススタディをコアメンバーで分担して行っているところです。

次回の検討会は、8月末を予定していますので、興味をお持ちの方は是非ご参加ください。

(エココミュニティWSリーダー 久米谷弘光
ご連絡・お問い合わせはjunkan@nord-ise.comへ)

▶森・棚田ワークショップ活動報告

循環型社会が成立するためには、都市と地方との物的・人的・知的循環が不可欠です。その第一歩として都市住民が積極的に地方に赴いて、地域の数多い“資産”に触れ、同時に人的な交流をすることです。棚田・森つくりWSはこうした観点から活動を開拓していくたいと思います。とはいっても、まだまだ独自で地域との太いパイプ作りはできないため、棚田ネットワークや森つくりフォーラムと連携して作業、交流を進めています。

棚田は千葉県鴨川市の大山千枚田に当WSの田んぼ76m²があります。田植え、草取り、稲刈り、脱穀などの作業のほか、千枚田保存会、地元地権者との交流や地域のウォーキングを行っています。また、棚田ネットワークでは「棚田の学校」をはじめ、数多くのイベントを開催していますので、こうした情報も積極的に案内します。森つくりは、神奈川県津久井町の「さがみの森」で作業を行っています。下草刈が主ですが、他に植林、間伐、林道整備のほか、山菜取り、植物・動物観察などを行っています。しかし、WS責任者の怠慢でこの1年間は活動していません。また、同フォーラムでも多くのイベントを紹介しています。森つくりの責任者を募集しています。

(森・棚田WSリーダー 山口民雄)

事務局からのお知らせ**【2004年度総会議事録】**

既にご案内の通り、5月26日に2004年度総会が開催されましたので、下記の通り、総会議事録を掲載いたします。既に会員各位に送付させていただいております総会資料もあわせてご参照ください。

日時：2004年5月26日（水） 19:50～20:40

場所：ノルドスペース セミナールーム

参加者：19名（出席者：12名、委任者：7名、うち団体会員2名）

<代表挨拶（山口民雄氏）>

循環型社会研究会代表の山口氏より、以下のような趣旨の挨拶がなされた。

- 循環型社会研究会が発足して以来、現場に赴き、循環型社会形成に向けた各地の取組み、様々な先進事例をみてきた。
- 今年は、循環ワーカー養成基礎講座という新しいプロジェクトも計画され、より充実した活動が期待される。
- 今後、基礎講座、専門講座、フィールドワーク、各ワークショップなどの成果を会員にフィードバックするとともに、社会にも広く発信、提言し、循環型社会の形成に向けて邁進していきたい。

<主要議事要約>

【議長選任】 平成16年度特定非営利活動法人循環型社会研究会総会の議長に、全会一致で田中宏二郎氏が選任された。

【議事録署名人選任】 平成16年度特定非営利活動法人循環型社会研究会総会の議事録署名人に、全会一致で久米谷弘光氏及び及川陽子氏が選任された。

1. 開会宣言（田中宏二郎氏）

田中議長から、出席者12名、委任者7名により、循環研会員（総数36名）の2分の1以上の出席があることが確認され、定款第27条に従い、総会が成立することが宣言された。

2. 第1号議案：2003年度活動報告の件（事務局 久米谷弘光氏）

- 事務局久米谷氏より、2004年5月20日の理事会で承認された「平成15年度事業報告書」（別紙参照）、「[参考資料]NPO法人循環型社会研究会2003年度活動報告」（別紙参照）を参照しながら、2003年度の活動報告がなされた。
- 各ワークショップ（WS）の活動内容については、各WSのリーダーから以下の報告がなされた。
 - エネルギーWS（荒川会員）：「エネルギーワークショップの平成15年度活動報告」（別紙参照）
 - エココミュニティWS（久米谷会員）：「エココミュニティワークショップについて」（別紙参照）
 - 水循環WS（川原会員）：「水循環ワークショップ実績」（別紙参照）

【採決】 第1号議案につき、全会一致で承認された。

3. 第2号議案：2003年度決算報告の件（事務局 吉川紀子氏）

- 事務局吉川氏より、2004年5月20日の理事会で承認された「平成15年度会計収支計算書」（別紙参照）、「平成15年度会計貸借対照表」（別紙参照）を参照しながら、2003年度決算報告がなされた。

【採決】 第2号議案につき、全会一致で承認された。

4. 第3号議案：2004年度活動計画案の件（事務局 久米谷弘光氏）

- 事務局久米谷氏より、2004年5月20日の理事会で承認された「平成16年度事業計画書」（別紙参照）を参照しながら2004年度活動計画が説明された。

5. 第4号議案：2004年度予算案の件（事務局 久米谷弘光氏）

- 事務局久米谷氏より、2004年5月20日の理事会で承認された「平成16年度特定非営利活動に係る事業会計 収支予算書」（別紙参照）、「平成16年度収益事業会計 収支予算書」を参照しながら、2004年度予算案が説明された。
- 収益事業については今年度も特に計画がないことが説明された。

*各ワークショップの活動計画については、各リーダーから以下の説明がなされた。

- エネルギーWS（荒川会員）：「エネルギーワークショップの平成16年度の活動方針」（別紙参照）
- 水循環WS（川原会員）：「水循環ワークショップ本年度計画案」（別紙参照）

※エココミュニティWSについては、「2.第1号議案：2003年度活動報告」の中で報告済みのため省略。

【採決】 第3号議案、第4号議案につき、全会一致で承認された。

6. 第5号議案：役員変動の件（議長 田中宏二郎氏）

- 田中議長より、2004年5月20日の理事会で承認された「役員に関する変動」（別紙参照）を参照しながら以下の点が報告され、出席者の確認を得た。

①高杉代表の退任

②新代表（山口民雄氏）および副代表（田中宏二郎氏）の就任

③任期途中の理事の退任（下鳥弘氏、高杉晋吾氏）

7. 閉会

議長の田中氏より、全議題の終了が宣言され、閉会した。

平成16年6月1日

議長 田中 宏二郎

議事録署名人 久米谷 弘光

議事録署名人 及川 陽子

事務局からのお知らせ

【循環ワーカー養成基礎講座のご案内】

現在開催中の循環ワーカー養成基礎講座は、第1回と第2回が盛会に終了いたしました。第3回以降もまだ受付けておりますので、奮ってお申込みください。尚、1回ずつの参加も可能です。開催予定は下記の通りです。本講座の詳細、お申し込みは、下記Webサイトにてご案内致しております。お問合せは事務局までお願いいたします。

▶ http://www.nord-ise.com/junkan/j_worker_course/j_worker_course.html

- 定員：各回30名（定員になり次第、締め切り）
- 開催時間・場所：各回とも18:30～20:30 ノルドスペース セミナールーム
(東京都中央区京橋1-9-10 フォレストタワー 8階)

第3回 (9/8)

「環境法」 市民のための早わかり環境法

—環境法の体系と活用— 籠橋隆明（日本環境法律家連盟 事務局長、弁護士）

第4回 (9/16)

「エネルギー」 エネルギーモクラシーを求めて

—再生可能エネルギーの普及戦略— 飯田哲也（環境エネルギー政策研究所）

第5回 (10/5)

「水循環」 四次元の水循環

—良好な水環境の保全に向けて— 嶋津暉之（水源開発問題全国連絡会）

第6回 (11/1)

「食 農」 農的循環社会への道

—地産地消・旬産旬消を考える— 篠原孝（衆議院議員、元農林水産政策研究所長）

【循環ワーカー要請基礎講座 記録者募集要領】

第3回～第6回の循環ワーカー養成基礎講座の記録者を下記の要領で募集いたします。

奮ってご応募ください。

1. 募集人数
 - 各回1名（複数回応募可）
2. 記録者の仕事内容
 - 講座内容を記録し文章にまとめる。
 - 提出物の日安：各回A4、5～10ページのワード原稿（※詳細応相談）
 - 記録する回の出席は必須となります。
3. 謝礼
 - 各回10,000円
4. 条件
 - 講座の録音テープを貸与いたします。
 - 特に応募条件はありませんが、記録いただく講座をよく聴き、内容を理解して、文章としてまとめることができる方にお願いいたします。
5. 応募締切
 - 8月末日
6. 応募方法
 - ご希望回、ご氏名、すぐに連絡のとれる連絡先を記載の上、事務局 蔭（その）までメール等にてお申し込みください。
 - ▶ 循環研事務局 蔭 巳晴 (sono@nord-ise.com)
7. 調整
 - 複数の方からご応募いただきました場合は、お申込順、出席の確実性、記録経験等をもとに選考させていただき、ご希望に添えない場合もございますので、予めご容赦ください。

【調査研究事業助成費 支給対象ワークショップの募集】

会員による自主的研究活動の活性化を図るために、ワークショップ活動に調査研究事業助成費を支給いたします。現在活動しているワークショップ、これから立ち上げようとしているワークショップで、調査研究事業助成費支給を希望する団体は、以下をよくお読みになって事務局（担当：吉川）までご応募ください。

● ワークショップ調査研究事業助成費 応募要領

1. 支給条件（下記①②の条件を満たすワークショップ）

- ① 活動計画書の提出
(形式自由。記入事項については下記「2. 活動計画書に明記する事項」参照。)
- ② 活動成果を循環研通信または総会で報告すること

2. 活動計画書に明記する事項

- ① ワークショップ名
- ② リーダーおよび参加者（会員3名以上）の氏名
- ③ 活動目的・活動内容
- ④ 今年度の活動計画

3. 対象ワークショップ数：6つまで

4. 支給額：上限2万円（2004年度）

5. 支給方法：領収書等を添付した使途報告に基づいて年度末に支給

応募するワークショップは活動計画書（上記2参照）を、8月末までに事務局（担当：吉川）宛にメールまたは郵送でお送りください。理事会において承認されたワークショップには、事務局より支給承認のお知らせをさせていただきます。

会員のみなさまの積極的なご応募をお待ちしております。以上、不明点などございましたら、事務局（担当：吉川）までご連絡ください。

循環研事務局 担当：吉川

東京都中央区京橋1-9-10 フォレストタワー7F (株)ノルド内

tel:03-5524-7334 fax:03-5524-7332 ▶ junkan@nord-ise.co

【循環研通信への投稿募集】

会員の皆様からの循環研通信への投稿を随時募集しております。是非とも活発なご投稿をお願いいたします。

どのような形態でも結構ですので（論文、日々の雑感、批評、情報提供、お知らせ、詩歌、等々）、会誌を通じて、会員の皆様や社会へ向けてなにかを伝えたいことをお持ちの方は、お気軽に事務局 担当：蔭（その）までご連絡ください。編集の都合上、掲載させていただくことができない場合等がございますので、あらかじめご了承ください。

<投稿要領>

1. 原則として電子媒体（メール添付、フロッピーベル送など）

2. 原則としてテキスト形式。Word形式の場合には、特殊文字使用、2段組編集を行わないでください。

3. 送付先

NPO法人循環型社会研究会 事務局（担当：蔭）

〒104-0031 東京都中央区京橋1-9-10 株式会社ノルド内

▶ e-mail junkan@nord-ise.co